

【生きるために】

沖縄県 粟国中学校

一年

糸洲 いとす わこ

私たちは「水」がないと生きていくことができません。そこに住んでいる人々の「水」に対する意識が向上していくことは、その地域の生活環境をより良いものに変えていけるのだと学ぶことができました。

私が「水」についての意識を変えるきっかけとなったのは、水道の水がない不便な生活を初めて経験した時でした。島の道路工事のため、一日中断水になった日がありました。学校から家に帰り、手洗いのため水道の蛇口をひねっても、水が出ません。トイレの水も雨水を溜めてあつた庭のタンクからホースでトイレまでつなぎ、水を溜めるといふ仕事が私に課せられました。

この経験から水の大切さについて考えるようになりました。水がなくなるのと、飲み水だけでなくトイレやお風呂に入ることもできず、生活のあらゆることが水の恩恵で成り立っていることを思い知らされました。水を確保することができなければ、とても不便な生活になってしまうのです。このような経験をしたことで、私の「水の大切さ」についての取材が、背中を後押しされるように始まりました。

まずは、自分の足下からの取材です。私が住んでいる粟国島に残っている水道が普及するまでの、水を得るための歴史や島民の苦労などを聞き取りました。そして、現在のような水道設備が整うまでに多くの人々の労力が使われてきた歴史を知りました。

雨水を溜めて生活していた頃は、天候によって「水」が不足する日が続くことがあり、島民は貴重な水をとでも大切に使用していたのです。島にある凝灰石をくりぬいて「トゥージ」（水がめ）を作った先人たちの知恵は今も島に貴重な文化財として残されています。「トゥージ」は一人では作れません。巨大な石のトゥージを作るために、時にはおよそ百人に近い人手を必要としました。一つの家で使うトゥージ（水がめ）を作るために、地域の人たちが寄り集まって協力したのです。また、クバの葉で水を汲む容器を作り、井戸

から水を汲み上げる道具として使っていたこともありました。学校から帰ったら、井戸から水を汲んで運ぶためになん往復もしなければならず、子供にとって毎日のきつい仕事だったそうです。

昔は水を得るために、大変な苦勞をしていたんだと思うと共に、水は限りある資源であることを痛感しました。自分の今の生活を振り返ると、粗末に使ってはいけないと反省します。

多くの人々の努力や科学の進歩によって、現在のような水の供給になっているのです。私たちが使っている水は、あたり前にあるものではなく、今でも世界では、多くの水問題に直面している地域があります。水不足のために、子供たちが生命の危機状態におかれている、という現実があります。まだ安全な水を手に入れられない人たちが世界にはいるのです。およそ六億人の子供たちが、整備されていない井戸や、池や川、湖、などから水を汲んで使い、不衛生な環境で生活しているため、肺炎などのさまざまな病気に感染しやすくなるなど、子供たちの命がおびやかされ続けている国や地域があります。私は、この記事に衝撃を受けました。そして、私たちがとても恵まれている環境にあることを知りました。

生きるために、水の問題と向き合い、生活をより良くしてきた先人たちへの深い感謝の思いが湧いてきました。

水への感謝を持つことで、水の出しっ放しを止めて、こまめに節水もできるような変わっていかれると思います。私たち一人ひとりが意識を変えたら、きっと大きな力となり、世界の水不足の問題も、乗り越えていけると思えます。